

四国遍路における臨床心理学的研究（2）

——遍路道空間と接待文化——

A Study in Clinical Psychology for Shikoku Henro Pilgrimage (2)

——The pilgrim road space and the settai culture——

黒木賢一

KUROKI, Kenichi

「大阪経大論集」第63巻第3号 抜刷

Osaka Keidai Ronshū Vol. 63, No. 3 September 2012

2012年9月 大阪経大学会発行

Edited by Osaka University of Economics Institute

四国遍路における臨床心理学的研究（2）

——遍路道空間と接待文化——

黒木 賢 一

I はじめに

筆者がインターネットで歩き遍路に関してアドバイスをした海外在住で日本人のS. Y.さんは、2012年3月のメールで次のように述べている。「その節は、大変お世話になりました。おかげさまで、八十八ヶ寺院を廻り、高野山にも参る事が出来ました。7年ぶりの日本で、初めての四国巡りでしたが、遠目で見ると、空、海、そして山々からエネルギーをいただきながら、色々な経験を楽しみました。しかしながら残念だったのは、生活排水、不法投棄、それに粗大ゴミが四国巡りの至る所で、否応無く目に飛び込んで来た事でした。そして、多くのお寺さんは、弘法大師の偉業や名前にぶらさがり、信心や感謝でなく、まるで営業最優先の様に感じられた事でした。はて、空海さんは、何とおっしゃるかな…何れにせよ、我が身を振り返り、これからの人生を大切に丁寧に生きたいと思えます。ありがとうございました。」

S. Y.さんのように、歩き遍路を行った人たちからよく聞くことは、一部の営業優先の札所への不満と不信感である。1200キロの遍路道は「点」である札所と札所の間には「線」でつながる遍路道がある。それを数珠でたとえるならば、「八十八ヶ所のお寺は、お遍路たちの歩く目標の場（粹組）であり、八十八の数珠玉（札所）に意味を見いだすのか、それをつなげる見えない紐（道）に意味を見いだすのかの違いである」（黒木、1999）。S. Y.さんは遍路道沿いのゴミの不法投棄と札所の営業優先への姿勢に対して失望したという。海外で在住しているがゆえに環境問題に関して意識が高い。日本人の歩き遍路の多くはこのことについて語ることは少ない。S. Y.さんのこの指摘の意味は大きく、四国遍路道文化を世界遺産にする運動を展開する場合、このような環境問題と営業優先の一部の札所の在り方が問われるであろう。海外に住み、四国八十八ヶ所を歩き、「我が身を振り返り、これからの人生を大切に丁寧に生きたいと」感じたS. Y.さんにお大師さんのご加護があったと信じている。

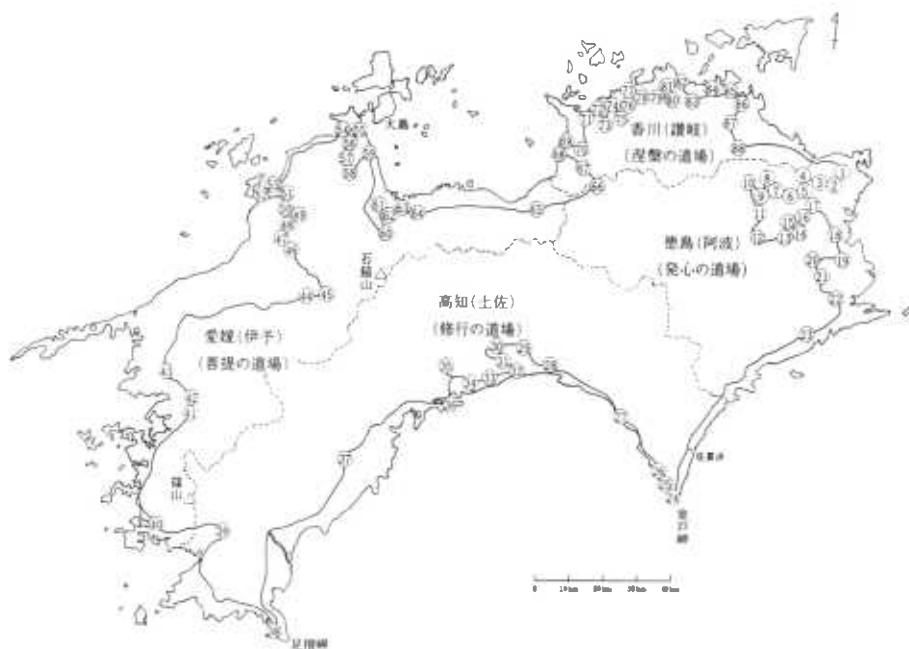
私たちは日常の生活の中で道（道路）について意識することはほとんどない。道は自宅から学校、職場、ある特定の目的地など日常の活動に対するありふれた空間でしかないからだ。遍路道のように公共性の高い道が私的物語りに近づいたときに公的なものから私的な意味合いをもつ。歩き遍路で四国の道を歩いていると、札所から札所につながる道空間に物語があることに気づく。では「遍路道」とは何なのだろうか。本稿では、まず遍路道

について様々な視座から道が何を語るのかを問い、次ぎに遍路道で体験する「接待文化」について述べる。

II 1200キロの遍路道と曼荼羅

四国遍路とは、徳島県の一番札所の霊山寺から、高知県、愛媛県を経て、香川県の八十八番札所の大窪寺に至る巡礼である。大窪寺を打ち終えると霊山寺に戻り、循環の巡拝が完了する。その後、お礼参りとして高野山奥の院に参詣するのが決まり事になっている。全行程は1200km 或いは1400km とも言われている。この距離を徒歩で「結願」するには45日から50日ぐらいかかる。筆者が大学院で指導した青木敬章の歩きでの調査では約1200km だという。時速4kmで8時間歩いても1日歩ける距離は32kmである。筆者が試みていた1日のスケジュールは、早朝5時過ぎに起床して、朝食を取らず6時には歩きだす。午前中に20km、午後は10kmを基準に歩いていた。時には民宿や宿坊がなければ、40km以上を歩くこともある。出来るだけ午後は早く宿に入り、汗まみれの下着や白衣を洗濯して明日の準備に備えるのである。

(図1) 四国八十八ヶ所霊場



『四国遍路のあゆみ』より

四国八十八ヶ所霊場の図1を見てみると、四国の大地に点在する八十八ヶ所の札所の多くは沿岸部に沿って数珠に似た円環の巡礼の道になっている。

徳島県の四国遍路は、第1札所霊山寺から第23番札所薬王寺までのルートで通し打ちならば1週間の行程である。戒律や道徳を守り仏道へ向かうための「発心の道場」といわれ

ている。霊山寺の売店で巡拝用品(白衣・白ズボン・輪袈裟・菅笠・金剛杖・納経帳・経本・納め札・小型鞆・ローソク線香など)を購入する。そして、四国遍路「作法とお経の意味」の冊子をいただき、「授戒(遍路の心得)」を受ける。すべて新しいことから始め慣れていく。遍路の身支度をして、自からを鏡で映すと自分であって自分ではない不思議な感覚に陥る。霊山寺を出て歩き始める。第2番札所は極楽寺1.4キロの距離、第3番札所金泉寺は2.6キロの距離、第4番札所大日寺は5.0キロの距離と札所の間隔が近いので、歩き方や札所での作法を身につけるには丁度良い。第6番札所安楽寺と第7番札所十楽寺には宿坊があり、多くの歩き遍路はどちらかの宿坊で泊まる場合が多い。宿坊で泊まれば、朝のお勤めがあり遍路の旅が始まったと自覚ができる。

最初の苦行は、第11番札所藤井寺から第12番札所の焼山寺の「遍路ころがし」といわれる険しい山道である。これは遍路のイニシエーション(通過儀礼)として位置されている。四国四県の遍路ころがしの中で一番厳しい場所である。1日かけ疲れ切った体で焼山寺に辿り着いたのに、納経所での第一声が「車ですか、歩きですか」と、筆者は同じフレーズを今まで三度聞かされた。大きな荷物を抱え、疲れ切った姿を見れば「歩き」だと分かるはずだ。この質問は駐車料金を徴収するためであり、歩き遍路の人たちに評判が悪いのは当然である。そして、山を下り、平野部に出て、第13番札所大日寺から第19番札所立江寺を巡拝する。また山に向かい第20番札所の鶴林寺と第21札所の太龍寺の山道は「遍路ころがし」と言われている。第22番札所の平等寺を抜け、第23番札所薬王寺に向かうと、視野が一気に広がり海岸線が現れてくる。

高知県の遍路道の距離は長い。通し打ちで歩くならば2週間かかる距離である。徳島県とことなり高知県は太平洋の海岸線と照りかえす光の世界をひたすら歩き続けるのである。悟りに向かって苦闘し、遍路を続けるか否かが問われる「修行の道場」である。

筆者は1998年に徳島の一国参りを終え、高知県に入り、野江にある遍路宿「まるたや旅館」で高熱がでて、帰神したことがある。この旅館の老夫婦は本当に親切な人たちで、熱にうなされた筆者をご主人が甲浦駅まで送ってくれた。現在は遍路宿を廃業しているのが残念だ。徳島県の第23番札所の薬王寺から高知県の室戸岬にある第24番札所の最御崎寺まで、歩いて3日かかる。ひたすら歩くという修行が待っている。最御崎寺の手前に「御蔵洞」がある。ここは弘法大師空海が求問持法を修行していると、口に明星が飛び込んでくる体験をし、その洞窟から空と海しか見えず、自らを「空海」と名付けた場所である。そして、第26番札所金剛頂寺を降り下っていくと、海岸線の平地が続く。土佐くろしお鉄道御免奈半利線沿いに北上する。高知市内に入ると第28番札所大日寺から第36番札所青龍寺へと巡礼し西へ進んで行く。第37番岩本寺から足摺御崎にある第38番札所金剛福寺まで、この行程も3日間かかる。ここからルートが二つに分かれ海岸線を北上するのか、来た道を戻り「真念庵」を通り第39番札所の延光寺をめざすかによってルートが異なる。

愛媛県は、苦闘から少し開放され煩惱を抱いたまま悟りに近づくといわれる「菩提の道場」であり、歩くことにも慣れ、心身に余裕が出てくる。第40番札所観自在寺から宇和島を通過し、2日かけて43番札所の明石寺へ行く。そして内子を通り、山道に入ると第44番

札所大宝寺と第45番札所の岩屋寺がある。この岩屋寺は境内の中にいくつもの窟があり、梯子を使って登る。古の行者はこのような場所で修行をしていたのである。そして厳しい山道を抜け、第51番札所石手寺に着くと、すぐそばに道後温泉街がある。筆者にとっては、「道後に着けば結願に近づく」という思いがあった。道後あたりで、全遍路行程の約3分の2が終わったことになる。そこを過ぎれば、石鎚山に近い第60番札所横峰寺が標高745メートルの高さにあり「遍路ころがし」と呼ばれている険しい札所に向かう。

香川県では、悟りに近づくということだが、歩き遍路の過程でその人なりに遍路の意味を理解し、幾つかのことが腑に落ちる「涅槃の道場」である。ここまで来ると、一気に打つならば、一週間ほどで結願することが出来る。終盤に近づくとき、なんとなく心残りになり、丁寧に歩いてお参りしたいという気持ちになる。第66番札所雲辺寺は険しい山中を歩くが苦しさはない。第77番札所善通寺は弘法大師空海が誕生した地に建てられており、この地からお大師さんの信仰が日本中に広がったのだと思いをさせる。第81番札所白峰寺、第82番札所根香寺の山道も険しい。第88番札所大窪寺の近くの女体山は岩に施されたチェーンをつかみながら通過する難所であり、最後のイニシエーションの場所である。

四国四県をつなぐ遍路道は、密教の「胎蔵界曼荼羅」で説かれている「四転説」による仏道修行の4つの道場として位置づけられ、東の徳島県は「発心」、南の高知県は「修行」、西の愛媛県は「菩提」、北の香川県は「涅槃」の道場と呼ばれている。

図2の胎蔵界曼荼羅の中央に位置するのが「中台八葉院」という八葉の蓮弁（蓮の花びら）を模して仏菩薩が配されている。東の宝幢如来は、宝をちりばめた旗印の象徴で、目標に向かって進むことを現すがゆえに「発心」になる。南の開敷華王如来は、花のつぼみの開くさまなので「修行」そのものである。西の無量寿如来は、悟りの世界を実感する段階と言われているがゆえに「菩提」の道場になる。天鼓雷音如来は、天上の太鼓にたとえ、釈尊の説法を強調した仏として「涅槃」にたとえられる。図2はこれらの菩薩や如来の配置と発心・修行・菩提・涅槃の各道場の意味合いを示したものである。

実際に歩いてみると、四季折々の中で自然の猛威にさらされることが多い。徳島県の「発心の道場」は八十八ヶ所を回り結願するという思いを胸に、「十善戒」を実践しながら歩く。札所での作法や般若心経を誦経するのきこちないが、発心の思いは固い。高知県の「修行の道場」は、太平洋の荒々しい海辺の道をただただひたすら歩くという修行そのものであり、「歩く行」とはこのようなことを意味するのだと気づかされる。愛媛県の「菩提の道場」は温暖な瀬戸内海の風景が遍路者の気持ちをなごませ、歩きに余裕と力を与える。香川県の「涅槃の道場」では、結願に近づくがゆえにすべてのことに感謝の念がわいてくる。この4つの道場が、四県の気候、風土、気質、にぴったり対応するのが不思議でならない。通し打ちと区切り打ちでは、随分現実感は異なると思うが心身の苦行という点では変わらないであろう。苦行には身体的レベルと心理的なレベルがあり、その奥には霊的レベルにつながっていると考えられる。

(図2) 両界曼荼羅図



『時空旅人 Vol 2』より

(図3) 中台八葉院



Ⅲ 遍路道空間における遍路者

1) 現代の遍路パターン

四国八十八ヶ所札所への巡礼には様々な回り方がある。旅行会社のツアーに入るのか或いは個人で計画して巡礼するのかの2つに分けられる。現代の遍路で最も多いのがバス遍路である。旅行会社のツアープランでもバスツアー、タクシーツアー(乗り合い、貸し切り)、歩きツアーに分けることができる。個人のプランで最も多いのは車遍路である。車遍路が多いがゆえに、車で巡礼するガイドブックも数冊出版されている。

歩き遍路の場合、一回で回る「通し打ち」と何度かに分けて回る「区切り打ち」に分けられる。また歩きに加えて公共機関利用する方法もある。また、自転車やモーターバイクを用いて回る場合も多い。

1. 旅行会社のツアープラン

①バスツアー(日帰り+1泊2日)

阪急交通社の新聞広告によると、団体バスツアーの「日帰り+1泊2日ツアー」で1年間12回で回るコースがある。巡礼の旅説明会を大阪・神戸・京都・奈良と近畿4府県でおこなっている。「四国八十八ヶ所札所お遍路の旅 3,980円」と書かれた図4の新聞一面広告は目を引く。「全12回、四国霊場会公認先達又はお寺の僧侶が発着地より同行」、「これは便利39カ所もの選べる発着地」、「朱印集めは添乗員が代行」、「もちろん一人さま参加もOK」、「一回だけのご参加もOK」、「第一回参加の方に付いているお参り入門セット」と魅力的なキャッチコピーが踊る。

全体の日程を見ていると、一番札所から開始して一年間で終わるようにプログラムが作

(図4)

られており、いつからでも参加ができるようになっている。基本的には何月からでもどの札所からでも、自由に参加できるようになっており、1年目に参加できなかった札所も翌年参加することができるシステムになっている。日程のペースについては、月1回が基本である。スタート月は1月、3月、4月、7月、9月、10月で、日帰りは1～3回目まで、4回から12回までは1泊2日のツアーである。

第1回は1番札所霊山寺～6番札所安楽寺、第2回は1番札所霊山寺、7番札所十楽寺～11番札所藤井寺、第3回は12番札所焼山寺～16番札所観音寺、第4回は17番札所井戸寺～23番札所薬王寺、4回で徳島を回る。第5回目からは高知県に入り、24番札所最御崎寺～31番札所竹林寺、第6回は32番札所禅師峰寺～37番札所岩本寺、第7回は高知県の38番札所金剛福寺～39番札所延光寺。愛媛県に入り40番札所観自在寺～43番札所明石寺、第8回は44番札所大宝寺～51番札所石手寺、第9回は52番札所太山寺～59番札所国分寺、第10回は60番札所横峰寺～65番札所三角寺、第11回は第66番札所雲辺寺（徳島県）。香川県に入り67番札所大興寺～78番札所郷照寺、第12回は79番札所高照院～第88番札所大窪寺、そして徳島の1番札所霊山寺に戻る。

お礼参りとして13回目が設定されており、日帰りが高野山の奥の院と金剛峯寺にお参りをする。また逆打ちプランや別格二十霊場めぐりも用意されている。

関西発着のバスツアーも阪急交通社以外にも、日本旅行社、神姫バスなどがあり、四国の発着の旅行会社も数多くある。

②タクシー（貸し切り・乗り合い）

四国の旅行会社では、乗り合いタクシーや貸し切りタクシーでのお遍路を企画している。乗り合いタクシーでのお遍路は、8名乗りのジャンボタクシーを利用して、最小催行人数は4名から募集しており、先達資格をもったドライバーが案内する。1回（11日間）と2

回(6日×2回=12日)で結願するコースがある。貸し切りタクシーでのお遍路は、一名からの参加ができ、一回(10泊11日)、二回(5泊6日×2)、三回(3泊4日×3)、四回(2泊3日×4)とプランを用意している。オーダーメイドプランだから自由でゆとりあるお遍路をうたい文句にしている。

③歩きを含むプラン

四国の旅行会社の中には歩きを取り入れたプログラムを組んでいる。6回で満願コースの場合、東京、名古屋、北海道、仙台、広島、博多と全国各地から参加でき、四国現地集散としている。6回×10泊11日で結願する。また関西・四国・中国の各地から参加が可能で、「歩きいいとこ取り」をキャッチフレーズで、歩く距離は1日6~7kmと短い。また、別の旅行会社は完全歩きツアーの企画をおこなっている。少人数(一組3名まで、最大募集人員はプログラムによって異なる)で実施している。1日あたりの歩行距離は25km~30kmが目安であり、経験豊富な先達が全行程を安全に同行ガイドし、宿泊も手配するという内容である。

2. 個人で立てるプラン

個人でお遍路に出かける場合、徒歩、自転車、モーターバイク、自家用車と様々な方法で巡礼をする。その中で最も多いのが車遍路である。筆者の身近にも車遍路で結願したのは二組いる。夫婦で回るには車は便利なツールであり、運転に疲れればどちらかが運転すれば良い。全行程は12日程で回れる。札所には駐車場が整備されており、駐車場代金は有料のお寺と無料のお寺がある。車遍路用のガイドブックが数冊出版されており、『四国八十八ヶ所クルマ巡礼ードライブお遍路』(KG情報, 2007)を見てみると、かなり詳しい道路路地図、お寺の内容、宿泊施設の一覧など、使いやすくて分かりやすい内容になっている。

筆者は歩き遍路をしているので自らの体験を踏まえて個人プランについて簡単に述べてみよう。筆者は区切り打ちで回っているので、2泊3日~4泊5日ぐらいの予定が多い。例えば、3泊4日の行程で前回高知県の第39番札所の延光寺で打ち終え、JR宿毛から帰ったとすれば、今回は次ぎのようなプランになる。

1日目(月日曜日)

新神戸(発) — 岡山(7:08着) — 中村(11:32着) — 宿毛(12:04着)

宿毛(高知県) — (18km) — #40観自在寺(愛媛県) 泊

2日目(月日曜日)

#40観自在寺 — (40km) — 宇和島 泊

3日目(月日曜日)

宇和島 — (10km) — #41 龍光寺 — (2.5km) — #42 佛木寺 — (11km) — #43

明石寺 卯之町(夜行バス) 卯之町22:40 発

4日目(月日曜日)

神戸三宮 5:30着

このプランでは行きは新神戸から新幹線を利用し、帰りは夜行バスを利用している。

帰りはJRを用いるならば卯之町駅から高松経由で岡山に出て、岡山から新幹線というルートもある。夜行バスは一ヶ月前ぐらいから予約している方がよい。この行程だと1日目は到着が昼ころになる。筆者の歩くスピードは時速4.5kmで計算して、宿毛から第40番札所観自在寺まで18キロあるので約4時間かかる。札所が閉まるが午後5時なので、間に合うと計算している。宿泊は遍路宿或いは札所の宿坊で、2食付きで6,000円ぐらいである。筆者は前もって宿は予約をしている。一巡目の時、宿は到着時間等が予測がつかず、前日或いは当日の昼頃に予約をしていた。このように個人プランはすべて自己管理のもとで、プランが立てられる。

2. 遍路行程の細分化について

遍路行程は札所と札所をつなぐ遍路道で構成される道空間で構成されている。巡礼の道としては、四国遍路の特徴は四国の大地に沿って円周を描くように札所が配置されているがゆえに、「円環の巡礼」といえる。図1を再度参照してほしい。第1番札所霊山寺から第88番札所大窪寺を打ち終えると第1番の霊山寺に戻る。そして高野山にお礼参りをする。四国遍路のような円環型の巡礼はめずらしい。多くの内外にある巡礼のほとんどは直線型であり、日本ではお伊勢参りや善光寺参りなど、海外ではエルサレム巡礼、メッカ巡礼、サンティアゴ巡礼などがある。これらの巡礼は聖地に直線的に向かい、終わればその道に戻る往復型がほとんどである。

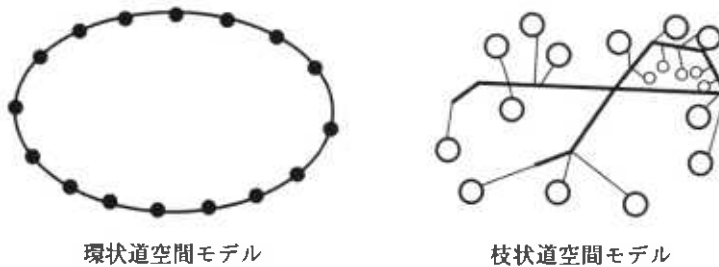
遍路行程の細分化について「日帰りツアー」に注目してみよう。前述した旅行会社のプランでは、「日帰り一泊二日の日程」で月1回のペース1年で結願するツアープランを提供している。参加できない月が生じてても後日参加できるシステムになっている。例えば、土佐県の第24番札所「最御崎寺」から第31番札所「竹林寺」を巡るツアーでは、高速道路との関係があり、第30番札所善楽寺、第29番札所国分寺、第28番札所大日寺、第31番札所竹林寺、第26番札所金剛頂寺、第25番札所津照寺、第24番札所最御崎寺の順序で巡礼をする。これは神戸三ノ宮から明石海峡大橋を渡り、淡路島から四国の徳島道を走り高知へと向うコースを取っている。バス遍路は時間的制限が多いがゆえに、高速道路を中心に国道や県道の道を選び、札所も効率できに回るように考えているからだ。

入江(2007)によれば、日帰りツアーが盛んになると新しい形態遍路道空間が一般化する傾向があるのではないかと遍路行程の細分化にめぐっての論考を述べている。次ぎの図5は2つの遍路道空間モデルを示している。

循環道空間モデルは、通し打ちで連続的に経験される遍路道の空間(●は札所)を示しており、日帰りツアーでは断片的に経験される空間(○は札所)を示している。

このように団体バスツアーの「日帰り+1泊2日ツアー」で一年間12回で回るコースは、一番札所から開始して一年間で終わるようにプログラムが作られており、基本的には何月から或いはどこの札所からでも参加することができる。このような巡礼システムは自由に

（図5）2つの遍路道空間モデル



参加が出来るメリットは大きい。

歩き遍路の区切り打ちは、打ち終えた札所、駅、バス停など打ち終えた場所から始めるがゆえ、円環をつなげる作業になっている。では、第一番札所霊山寺から第八十八番札所大窪寺の順打ち或いは逆打ちでなければ円環の巡礼にならないのかという疑問に対して、四国の人たちは、地元の札所からスタートさせ回り、その札所で結願している。

3、「歩き遍路」と「乗り物遍路」

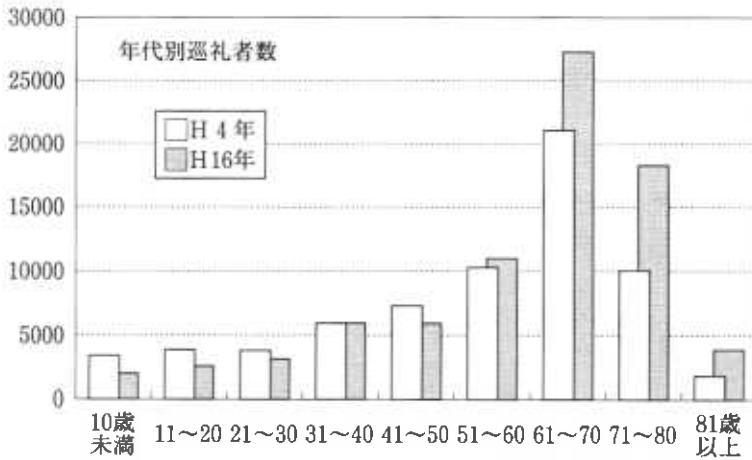
長年四国遍路における年間の巡拝者数に関する調査がなく正確な数字が明らかにならなかった。しかし、平成4年に西条市の秋山節夫さんが第64番札所前神寺本堂の納札を、平成16年に愛媛県東温市の高井秀和さんが第58番札所の仙遊寺の納札を整理した調査がお遍路さんの人数に最も近い数字だと評価されている。この二人の調査は、全札所を結ぶ情報誌『へんろ』に掲載された。平成4年の秋山の調査によれば、一年間の納札の総数は約10万6千5百枚であった。また高井（2009）の平成16年の調査によると、一年間の納札の総数は約12万2千人であり、男性約5万人に対して女性は約7万人だった。次ぎの図6と表1は二つの調査の比較を示したものである。この二人の調査は異なる札所であることや調査方法の違いなどがあるが、このような数字が示された意味は大きい。

年代別にみると六十代が圧倒的に多いのは平成4年と同じだが、次いで五十代が多かった当時と比べ七十代が急増しており、巡礼者を地域的にみると平成四年当時、四国、近畿、中国の順であったが、今回の調査では地元四国が大幅に数字を減らして近畿と逆転していると述べている。

今回の二人の調査を比べるのは統計的には問題があるが、平成4年から平成16年の間に1万6千人増加していることになる。移動手段においては、バス遍路、車遍路、歩き遍路の順であろう。地域的に見ると四国が大幅に数字を減らして近畿と逆転している点に関しては、平成10年（1998）明石海峡大橋が開通し、本州から四国への道路がつながり、バス遍路を加速させたものと思われる。それによる70代が増加したと考えられる。また男性約5万人に対して女性は約7万人という数字はバス遍路に女性が多いことが伺えるのではないだろうか。

バス遍路の日帰りツアーは歩き遍路にくらべれば、準備が簡単で気軽に参加できるとい

(図6)



(表1)

(人, %)

	10歳以下	11~20	21~30	31~40	41~50	51~60	61~70	71~80	81歳以上
H4年	3,478	3,901	3,818	5,943	7,285	10,297	21,144	10,114	1,819
	5.1	5.8	5.6	8.8	10.7	15.2	31.2	14.9	2.7
H16年	1,998	2,562	3,162	5,940	5,944	10,999	27,356	18,323	3,872
	2.5	3.2	3.9	7.4	7.4	13.7	34.1	22.9	4.9

う特徴がある。インターネットで申し込み、住居の近くの駅まで行けば、バスが待っている。そのバスに乗れば四国第一番札所霊山寺に着き、必要なお遍路道具を購入し、法話を聞き四国霊場会の公認先達が作法や各札所のことについて教えてくれる。また朱印は添乗員が代行してくれる。昼食も用意してくれ、何から何まで世話をしてくれる。その意味では、確かにお遍路に出かけるのだが、「日帰り観光」の感じは否めない。しかし、継続して参加した人たちは「顔なじみが出来ることが楽しい」という。

バス遍路と歩き遍路との違いは、自分が計画をたて、乗車券を手配して、四国に渡る。白装束に着替え、荷物を担ぎ、遍路道を歩く。その日の宿は前もって予約するか当日電話をかけるか、すべて自分で行わなければならない。その意味では遍路に関する「コミットメント」と遍路者としての「意識性」の違いは大きいように思われる。バス遍路の利点は、体が不自由であったり、高齢で体が動きにくい人たちにとっては、ありがたいツアーであることは間違いない。

バス遍路と歩き遍路の違いは、遍路者の「コミットメント」と「意識性」であろう。歩き遍路者の場合は、より深く遍路という非日常世界、言い換えれば「神話的時間」に入り込む。遍路は聖地巡礼であるがゆえに、本来的には「修行」的要素がそこには含まれている。第1番札所の霊山寺では、遍路者になるために白装束に身を固める。白装束は非日常

の時間と空間に入り込む儀式的な装置であると考えられる。それゆえ、白装束は死装束ともいわれる所以である。菅笠には「ユの梵字」、「同行二人」、「迷故三界城 悟故十方空 本来無東西 何処有南北」の偈文が放射状に書かれており、この偈文は葬送儀礼に用いられる。また金剛杖は弘法大師の分身とされており、もっとも丁寧にお遍路では取り扱うものである。この杖は卒塔婆を表しており、過去においては巡礼の途中で行き倒れた場合、墓標の役割を過去では担ってきた。遍路者が白衣を着て、菅笠をかぶり、金剛杖をもつスタイルは、シンボリックな意味で「死」を表していたからだ。平安時代の宗教者が修行していた行為が、江戸時代になると一般庶民により遊行・物見遊山の要素が加わってくることで、四国遍路の大衆化が始まり、巡礼の意味が変化することになる。関(2003)によると、遍路者にとって移動は単なる移動ではなかった。遊行或いは物見遊山であっても、始まりのときから修行感覚を潜在させていたのであって、それは、歩くという苦行を前提にしており、遍路の歴史は歩き遍路の歴史でもあると述べている。しかし、自らの身体を用いた移動手段からモータニゼーションの発達による「乗り物」の出現は、巡礼に対する意識をより一層変えることになったのは事実である。それは巡拝バスという大量輸送手段が遍路の世界に参入することで、簡単に回れるようになったからだ。歩き遍路者の中にはバス遍路者に対して「スタンプ遍路」や「観光遍路」などと表現し、歩きこそが信仰心を示す方法であるという遍路者もいる。このように「一方では、遍路はあくまでも「修行」と認識し、それは「歩くこと」でしか成就されない、と古来の伝統を引き継ぐ立場があり、他方では、弘法大師縁の霊場を巡り、その功德に接することが大事で、方法はどのような形ではいいのではないかとする立場がある」(関, 2003)。筆者は「歩き」にこだわっており、遍路道を歩いた時空を超えたお遍路さんたちに近づくことで「神話的時間」に入りたいと考えているからだ。しかし弘法大師空海は「歩きであろうと、車であろうと、バスであろうと功德はみな同じだ、ただ体験が異なるだけだ」と言うのではないだろうか。どの移動手段であろうと、四国遍路に行こうと考え実行したときにお大師さんからの「招待状」を受け取ったと考えればよい。

2) 遍路道空間

1. 道空間のパースペクティブ

遍路道を歩いていると、道空間(道とその風景)について様々な気づきが起こってくる。歩き遍路者にとっては、見知らぬ町の道なので、地図(へんろみち保存協会編)と遍路ステッカーをたよりに移動しながら、目の前の道を確認しながら歩いている。分からない場合は、地元の人に聞けば親切に教えてくれる。三叉路ではどちらの道を行けばよいのかと迷い、地図で示されている郵便局や小学校が現れれば、この道で良いのだと意識レベルでチェックをする。日常生活空間における道ならば無意識レベルで反応している。

長田(2007)は、行為者の視点から「環境」、「認知フレーム」、「表現」の3つのキーワードをもとに道空間のパースペクティブについて、少し長くなるが次ぎのように述べている。